

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

魔法少女
シフォン
汚された桃姫



小説 斐芝嘉和

挿絵 高浜太郎

プロローグ	006	
第一章	ひみつのシフォン	009
第二章	それぞれの夜	027
第三章	魔女たちのインテルメッツォ	055
第四章	クリーミー・シフォン	069
第五章	歪み	106
第六章	魔淫のグラウンド	146
第七章	保健室の情事	174
第八章	淫墮の教室	197
エピローグ		251

登場人物紹介

Characters



シフォン・リンフィ

魔法の国ジュノワーズの第十三王女。反乱に失敗した姉を追いかけて人間界を訪れた。姉の波長を追って、風太の通う学園へ転入する。

やなぎふうた

柳風太

眼鏡をかけた小柄な少年。臆病だが、だからこそ男らしくありたいと思っている。

ルード・リンフィ／ふじわらはるか藤原春香

シフォンの姉でジュノワーズの第二王女。クーデターに失敗して人間界に逃げ込む。保健室の先生に化けて風太の通う学園に潜伏中。

フィズ

シフォンの使い魔。その真の姿はコウモリの翼と蛇の尾を持つ魔獣グリフォルフ。

「アナタも気弱そうな坊やを唾え込もうとしていたみたいだけれど……ふうん？　いまの限界ってコトは、昨晚犯りそびれたみたいねえ」

「……ッ！」

耳の先まで赤くなる妹をクスクス笑ったルードは、唾液にぬめり光る舌を伸ばし、紅い唇を見せつけるように舐めた。

「アナタが食べないなら、私がいただいちゃおうかしら？　あんまり美味しそうではないけれど、他人のモノを横取りするのって愉しいし☆」

「ふ、風太さんには、手を出さないでっ！」

「シフォンちゃんにそんな顔をされると、ますます食べてみたくなるわねえ」

「お、お姉様……きやつ!？」

いきなり脚を掬われ、テーブルの上に仰向けに横たえられた。姉との会話に夢中になっていたが、魔法に操られている生徒たちに連行されている最中だったのだ。

「リンフィさん、軽うい！　お肌もスベスベね！」

ニヤニヤ笑ったクラスメイトたちが、羞じらうシフォンの身体に手を伸ばす。

「や、やめて……イヤッ！　放してッ！」

慌てて手足を縮め、丸くなるうとしたのに、ルードの魔法をかけられた女生徒たちの力は強かった。掴まれた手首が折り曲げた膝の間に引き込まれ、荒縄をかけられて足首の内側に結わえつけられる。まっすぐ伸びた肘と深く折り曲げられた膝も縄で括られ、膝を閉

じようとしても腕が邪魔になり、肩幅以上には狭められなくなってしまふ。

(ああ……なんて、はしたない格好！)

男を待ち受けるように大きく左右に開いた太股、まっすぐ伸びた腕に両脇から圧されて中央に寄せ合わされた幼い乳房——両手は秘部の傍にあるのに、脚に結わえられているから隠せない。腹まで捲れ上がったスカート往直すこともできない。

伸びた下着がずれ、半分以上こぼれ出ている美尻。透き通るほど瑞々しい柔肌は羞恥に炙られて淡いピンク色に染まり、色も形も本物の桃の実のよう。フリルもレースもついていないレグホールは太股のつけ根に喰い込み、桜色に染まった柔肉を歪めて瑞々しい弾力を強調していた。黒いニーソックスに締めつけられた優美な脛と白く瑞々しい太股が美しいコントラストを醸し出す狭間、肌の色が透けそうなくらい伸びきった純白のショーツに、柔らかく潰れた肉畝の形がはつきり浮き上がって見える。

「やあん、可愛いっ！」

祭壇に捧げられた供物のような美少女に、クラスメイトたちが歓声をあげた。脚の内側に添え木のように伸びた腕が乳房を左右から寄せ合わせているため、制服の胸には小振りな美乳の形がハッキリと浮き上がっている。大きくM字に開いた脚の側から覗き込めば、チェック柄のスカートは完全に捲れ返り、桜色に染まった瑞々しい尻肌や秘部の形を浮き上がらせた下着が丸見えだ。

(見ないで、見ないでっ！)

ギユウツと臉を閉じて、テーブルの周りに群がった少女たちの息遣いを感じる。羞恥に火照った太股には無数の視線が這い回り、そのチリチリした感覚が次第に股間へ近づいてきて――。

「アソコがふっくら盛り上がっちゃって、なんだか触ってくださって感じね！」

歓声をあげたクラスメイトが数人、テーブルの上に身を乗り出し、無防備に晒されたシフォンの股間に手を伸ばした。

「あっ!? や、ダメ……触らないでっ！」

白魚のような細指が数十本、ふっくらと盛り上がった股布に上からも下からも左右からも殺到する。どこをどうすれば気持ちよくなるのか実体験として知っている指先は、ほのかに温かな薄布に触れた途端芋虫のように蠢き始めた。

「リンフィさんのオマ○コ、柔らかあい！」

シヨーツの上から肉畝の峰を優しく撫で回し、割れ目に沿って何度も往復する細指。かと思えば弾力を確かめるように押し込み、指の腹を押し当ててしごくように揉む。

身体の中でもっとも敏感な肉豆には硬い爪の尖端が触れそうなほど接近し、しかし触れずに離れていく。肩透かしを喰らってホッと息を吐くと再び爪が近づき、激感を予期して身を強張らせると嘲笑うかのように離れていく。

(あ……遊ばれて、いる……!!)

目を閉じていても、少女たちの忍び笑いは聞こえた。

「ビクビクしちゃって、可愛いわねえ」

「大人しそうな顔して、ずいぶんと敏感ね」

「ひとりエッチより気持ちイイのかも。ひよつとして、もう濡れてるんじゃない？」

「ふあっ!? ダメ、挿入しないで……ああっ！」

薄布を押し上げた柔肉の狭間に、細指が挿し込まれた。割れ目に喰い込む裏地にクリトリスがしがごかれ、走り抜ける電撃。堅いテーブルに横たわった背が跳ねるようにくねり、割れ目がジワッと熱くなる。

「あらまあ、気持ちよさそうなお顔なこと。まだまだ子供だと思っていたけど、オマ○コは立派に成長しているみたいね」

「お……お姉様ッ！」

嘲笑う姉をキッと睨み上げたシフォンは、その傍に立つ教師に気づいてハッとした。

「授業中になにをしているの!? 悪巫山戯わるふざけはおやめなさい！」

助けてくれるのか、と一瞬気が弛みかけたが、家庭科室全体がルードの魔法圏内にあるのだからそんなはずはない。

「この班は、クリームもできてないの？ 仕方ないわね、先生が手伝うわ」

ニヤニヤしながら腕まくりをした女教師は、紙バック入りの生クリームを手にしてテーブルによじ登ってきた。

「な、なにを……あっ!? やあっ！」

懸命に閉じようとしていた脚が、教師の肘に圧されて左右に開く。秘部を守るショーツに手がかかり、下腹を締めつけていたゴム紐が引っかけて吊り上げられ——ふわっ！

薄布の下で温まっていた恥丘が冷たい空気に撫でられ、背に鳥肌が立った。引っ張られた下着はほっそりとした莢さやが見えそうになるほど伸び、なだらかに起伏する白い下腹部が露わにされてしまう。

「あら？ まだ生えていないのね」

覗き込んでクスッと笑った教師は、瑞々しく輝く幼気な秘部に紙パックを近づけ、白いクリームを注いだ。

「ああっ!? ああ、イヤ、冷たい……イヤァッ！」

分離しやすい生クリームは、直前まで冷蔵庫でキンキンに冷やされていた。無防備な柔肌に氷のような冷たさが染み、ヘソの下がキュウツと痛くなる。白い液体は薄布と柔肌のわずかな隙間を流れ落ち、不快な冷たさは尻の下にまで広がった。下着はたちまちグッチヨリと濡れ、再び戻されると感じやすい肉畝にヌチュツと貼りつく。氷の舌で舐められているようで気持ち悪い。

が、悲鳴をあげるのはまだ早かった。

「オマ○コが燃えているみたいに熱いわね。これでは脂肪分が分離してしまうわ」

もっともらしいことを言った教師が、氷の欠片が入ったボウルを手にした。生クリームに濡れたシフォンの下着をひっぱり、その中にジャラジャラと注ぎ込む。

「ひあううっ!? 冷たい、冷たいいいっ!」

「ダメよりンフィさんっ! 大人しくして!」

左右から伸びてきた手に膝を掴まれ、肩を押さえられた。藻掻くこともできなくなった美少女の股間、山盛りの氷の欠片を含んでモコモコと盛り上がったショーツの股布に、

「こうしてよく冷やすのよ!」

教師の手が被せられ、擦り込むように揉み込まれる。

「ひうっ!? あっ!? 痛い……や、ああっ!」

ジャラジャラと転げる氷に揉みまкруられ、痛いほどに冷えていく恥部。小さな欠片が割れ目の中へ迷い込み、淫唇の狭間やクリトリスの下、尿道や膣穴に喰い込んでくる。プリッとした小振りな桃尻に鳥肌が立ち、

（うう……あっ!? い、いけない……ッ!）

急速に冷やされた下腹の奥が、ズン、と重くなった。

尿意だ。

細管の出口を刺戟されたせいで膀胱に熱い液体が溜まり、いまにも噴き出してきそうだ。

「や、やめ………てえっ!」

恥辱の予感に頬を歪め、掠れた声で叫んだのに。

「外からだけ? 中に入れてみましょうよ!」

勝ち誇った笑みを浮かべて妹を見下ろしていたルードが、姿を隠したまま教師の耳元に

囁いた。魔法を織り込まれた言葉は脳髓に染み、己の意思と錯覚させる。

「こんなに熱いオマ○コは、裏側から冷やさないといけないわね」

理由をつけた教師はグッチョリ濡れた股布に指をかけ、横へずらした。

「ひう……ッ！」

氷の群にしごかれて真っ赤に火照った肉畝が冷たい滴を撒き散らしつつ、プリッと飛び出した。氷水に責め立てられてピクピク震える粘膜花卉が股布に引っかけられて歪んだ土手肉を押し退け、鮮やかに紅く鶏冠とよかのように波打つ縁を覗かせる。

(ああ、ああ……ッ！ 見られてる、見られてるうっ！)

濡れて冷えた秘裂はいつも以上に敏感で、周りを取り囲んだ少女たちの好奇の視線をチクチク感じた。冷たい滴に濡れた尻房の狭間、羞恥の炎に炙られて紅く染まった会陰部は、微風に撫でられただけでも微弱電流が湧き上がる。

そこへ——ピトッ！

「ああっ!? い、イヤです、やめて、やめてえっ！」

尻穴に痛いほど冷たい氷の塊が押しつけられた。少し大きめの座葉のような形。細いほうの先を掴み、太いほうの尖端をシフォンの尻穴に押し当てた女教師は、

「こうして中からも冷やせば効果抜群よ」

羞じらうシフォンの顔色を窺いつつ、指先に力を込める。

グ、グ……ググッ！

「いあうっ!? ああ、ああっ! は、入って……く……るうっ!」

押し拡げられた太股が震えるほど力を込めて排泄孔を締めていたのに、体温に溶ける氷はヌルヌル滑り、呆気ないほどあっさりと潜り込んできた。敏感な直腸粘膜が刺すような冷たさに驚き、痙攣しながら蠕動する。

(く……ああっ!? そ、そんなああっ!?)

涙滴型の氷は、蝨く粘膜に圧されて奥へ奥へと潜り込んだ。染み込む冷たさに下腹部が捻れ、キュルル、キュルル、と不穏な音を立て始める。

「ひとつだけではすぐに溶けてしまいそうね。もっとたくさん氷が要るわ!」

「はい! 私が作ります!」「私も!」

競うように拳手した少女たちが、棒状に削った大きめの氷をしゃぶり、ちょうどいい大きさと形にしてテーブルに登った。

「くうっ!? ああ、イヤあつ! ダメ、ダメ、入れちゃ……いやああつ!」

尻穴にひとつ、またひとつ、ねじ込まれてくる氷の弾丸。あとから入ったモノが前のモノを押し、狂ったようにのたうっ排泄粘膜を滑って奥へ、奥へ。

キュルルル……キュキュ、クポポッ!

捻れる下腹に激痛が走り、シフォンは縛られた手足を振ってピンクの髪を振り乱した。尿意は最高潮に達し、冷水に濡れた秘裂の底がウズウズし始めた。沸騰した小水が出口の傍まで迫り上がってきている。これ以上にかされたら、確実に嘔き出してしまう。

「も、漏れちゃう、漏れちゃううっ！ お、お願い、トイレに……行かせてえっ！」

「あら、いきたいの？ しょうがないわねえ」

苦笑した教師が、ポケットから細長いなにかを取り出した。

ガラス製のマドラーだ。

透明感のある緑の棒は、太さは安物のボールペンくらい、長さはそれより長く、先端に小指の先くらいの珠が光っている。

「な、なにを……あっ!? いや、だめえっ！」

股布をずらされて露わになった秘裂が、教師の白い手に押さえられた。ほっそりした指がV字に開き、押し拡げられる肉畝。淫熱を溜めて厚みを増し、愛蜜を滲ませて鮮紅色に染まったビラビラが、震える縁から甘酸っぱい滴をこぼし、いやらしく咲きこぼれる。

「望み通り、イかせてあげるわよ」

「と、トイレですッ！ 行きたいのは、トイレええっ！」

「贅沢な仔ね。トイレにはあとで連れて行ってあげるから、まずはココでいきなさい」

ヌチュッ！

冷たく硬く丸いモノが、男を知らぬ膣穴に押し込まれた。マドラーの先に膨れた小さなガラス球だ。小指の先より小さな珠は、あどけない壺口に滲んだ蜜にぬめり――。

「はうっ!?」

入ってすぐの場所を軽く抉られた瞬間、生まれて初めての感覚が弾けた。静電気に撃た

れたときの感覚に似て、便意に苦しむ下腹がビクッと跳ねる。

(な……なに、いまの……!?)

痛みに似た鋭さはすぐに消え、染みつくような甘い痺れに変わり始めた。尖端のガラス球がようやく潜る程度にしか押し込まれていないのに、縛られた身体に電気が走り、腰が振れる。足首に結わえられた手首の先で拳を握った細指が震え、膝を左右に押し拡げる添え木のような腕がもどかしげにくねってしまふ。

「ほうら、気持ちいいでしょう？」

ニンマリと笑った女教師が、細指で抓んだガラス棒を軽く捻った。

「ふあっ!? ああ、ダメ……ビンビンする、ビンビンしちや、うううううっ!？」

入り口をしがれただけなのに、膣穴に電流が渦巻く。淡い快感が水位を増し、痛みではなく悦びだと、はつきり知覚できるようになる。

(そ、そんな……そんな……ッ!)

カアッと熱を帯びる淫唇に、新たな蜜が滲む気配。狂おしいまでの尿意も心地よい痺れに変わり、膀胱が沸騰し始める。

脚に向かって伸びる腕の下、制服の中で押し潰された乳房が火照る。胸先に時折閃く鋭い感覚は、ブラのカップにめり込んだ乳首か。

こんなことで感じてしまうなんて、こんな恥ずかしい格好で追い立てられてしまうなんて——羞じらっても、冷たく小さなガラス球で膣穴の入り口をキュポキュポ鳴らされると、

身体の中に突風が吹いて意識が浮き上がってしまう。

強制された昂りは止められない。

「さあ、いきなさい。みんなで見えてあげてあげるから」

「ひうう、ひうう……ッ！」

ピンクのツインテールを振り乱し、イヤイヤイヤ、と首を振るシフォン。

淫悦と便意、尿意が共鳴し、競うように高まって、もはや一刻の猶予もない。

「トイレ……トイレええ……行かせて、お願い……ッ！」

絞り出した声が膀胱に響き、下腹の鈍痛がこらえがたいほど強くなった。

熟れ柿のように赤らんだ額に、フツ、フツ、と噴き出す脂汗。

氷の塊を押し込まれた尻穴が内側から圧されているようにモコッと膨らみ、硬く締め

いるつもりから薄く色づいた液体が少しずつこぼれ――。

「くう、うう、うううっ！ ダメ、もうダメええっ！ 出ちやう出ちやう、出ちやああ、

ううううう――ッ！」

ピュピュッ！ ピュルル、プツシャアアアッ！

プピピッ！ プポ、プポポッ！

尿孔と尻穴から、湯気立つ液体が勢いよく迸った。

「ふああっ!? ああ……あああっ！」

爆発する羞恥と狂おしい便意がウソのように消えていく解放感が混じり合い、遙かな虚



「魔法少女のコスプレかな？　へへへ、変態のクセに可愛いじゃないか」

シフォンを便所に連れ込むのと並行してルードが魔法をかけていたのか、男子生徒たちの顔にはもう、理性は感じられない。早くも頬を赤らめ、目をギラギラさせて、ヒトの形をした獣のようだ。

（ま、魔力つて……まさかつ?!）

（そう、その「まさか」よ）

驚くシフォンの脳裏に姉の声が直接響く。

（アナタは好き嫌いが激しい質^{たち}だけれど、これだけたくさんいればどれかひとりくらいは波長が合うんじゃない？）

言葉の端々に嘲笑が混じっているから、本当は逆のことを考えているのだろう。

逆のこと——波長の合わない男に精液を注がせ、魔力を妨害すること。

（お姉様……酷いッ！　これ以上こちらの世界のヒトたちを巻き込まないで！）

飛ばした思念に返事はなく、わずかに感じられたルードの残り香も消えた。

狭いトイレの中には縛られて動けないシフォンと、鼻息を荒げた少年たちだけ。

「可愛いなあ。俺、こういう妹が欲しかったんだ」

厳つい顔を不気味なくらいに弛めた男子生徒が、シフォンの小さな頭をグリグリ撫でた。ヒトの頭を撫でるというより、犬を褒めているような荒々しい手つき。

「く……ッ！　触らないでッ！」

頭を振って逃れても、反対側に待っていた手にピンクの髪房を掴まれる。

「テメエだけのもんじゃねえって。俺たちの玩具だろ？」

「奴隷だよ、奴隷。ペットでもいいか」

下品に笑った少年たちの手が何本も伸びてきて、シフォンの顔に群がった。

「ううっ!? や、やめ……ンぷっ!」

頬を揉まれ唇を弄られ、鼻を掴まれる。太くてゴツゴツとした指は口の中まで挿し込まれ、歯茎や舌まで揉み込まれた。

乱暴な扱いに腹を立て、美眉を逆立てて睨みつけても、

「お、いいねえその顔！ レイプしてるって感じだ！」

ルードにないを吹き込まれたのか、少年たちは踊り出さんばかりに悦んだ。だからからということもなくイソイソとベルトを緩め——ブンッ！

ブンブンッ！

赤黒く怒張したペニスが唸りをあげて林立する。

「っ!」

風太のモノより一回り以上大きなモノ、風太のモノより雄々しく反り返ったモノ、風太のモノより鋭い亀頭、風太のモノより紅さが目立つ鮎色の肉棹——同じ器官のはずなのに、ひとつとして似たものはない。唯一共通しているのは、息苦しくなるようなおぞましき。心理的な差なのか、シフォンの口の中で健気に膨らんだ風太のアレに感じられたある種の

可愛らしさは欠片もない。ゴツゴツした淫茎も、そこに浮き上がった血管の網目も、クッキリとエラを張り出した亀頭の紅玉のような色艶も——少年たちの醜い獣性が凝り固まったモノのように、ただいやらしく不気味なだけ。

「そ、そんなモノで、なにをする気ですか？」

「んん？ なにをするんだったかなあ」

とぼけた少年がポケットから、DVDのパッケージを取り出した。

「あ……ッ!？」

風太の部屋にあったアレだ。しかも、三人の女性が意味もなく縛られたり竹刀で打たれたりしていた、新シリーズ二作目。

「お前、こういうのが好きなんだって？ 誤魔化しても無駄だぞ。俺たちはちゃんと、春香先生から聞いてるんだから」

「こういうのをしてくれって迫ったら、彼氏がビビって、フラれたんだってな」

「でもって、欲求不満が爆発しそう、どうしたらいいんでしょうか先生……って、俺たちの出番となったわけだ」

魔法で風太の部屋を家捜ししたルードが変態的なビデオを発見し、意地悪な粗筋を思いついたのでろう——そこまではすぐ考えられたのに、どうすればこの局面を切り抜けるか分からない。

（風太さん、風太さん……私、どうすればいいのですかっ!?)

根が優しい眼鏡の少年は、縛ってくださいとお願ひしたのに自制して、シフォンに触れようとしなかった。が、目の前に立つ男子生徒は逆だ。シフォンがどんなに哀願しても、自分たちの獣欲が満たされぬうちは決してやめてくれないだろう。

せめてもの抵抗として唇を噛み、おぞましい肉棒の群から目を背けたのに。

「なにシカトしてんだ、ああっ!? ありがとうございませすくらい言えよ、変態女!」
「キヤッ!」

髪を掴まれ、乱暴に揺さぶられた。ギュッと脛を閉じた顔に生臭い肉棒が擦りつけられ、額や鼻筋に汚らわしいぬめり——先走り汁が塗り込まれる。

熱い、硬い、臭い。

風太のモノは唾えることができたが、それは相手が風太だったからだ。

(こ、こんな……こんな、汚物、なんてっ!)

見ず知らずの少年の男根は、小便をするための汚らわしい器官でしかない。不気味な白濁液を噴き出す、恐ろしい物体。グリグリと擦りつけられた頬や脛が爛れてしまいそうだ。尖端に膨らんでいた生臭い粘液を擦り込まれると、毛穴から染み込んで身体の内側まで穢されてしまうような気がする——と。

「ほら、口を開けな! テメエの大好きなチンポを唾えさせてやるよ!」

真っ赤に膨れた亀頭が唇に押しつけられた。

口が覚えていた風太のモノより遙かに硬く、大きく、猛々しい。

「うう、ンぷ……ンううっ！」

頭を振って逃れたいの、左右から伸びてきた手にツインテールを掴まれ、逃れられない。擦りつけられた肉塊は唇を外れて鼻筋に滑り、頬や顎にも生臭い粘液の筋をつけられた。

「口を開けろって言ってるんだろが！」

「うッ!? く、うう……ッ！」

鼻を掴まれ、息を止められた。口で息をさせ、その隙にねじ込もうという魂胆だろう。

(そんな、こと……)

獣のような少年たちの思い通りにはなるものか、と奥歯を噛み締めて耐えるシフォン。頬が赤らみ、息苦しさに瞳が潤む。視界が白く掠れ、指先がピリピリ痺れてくる。

「なに我慢してんだ？ 死にてえのか？」

鼻を掴んでいる少年が、怯えの混じった声を出した。それを見上げる魔法少女は、形よ眉を歪めてこらえがたい息苦しさと懸命に戦う。

(自分たちの愚かな振る舞いを、悔い改めなさい……！)

掠れていく意識を掻き立て、周りの男子生徒を睨みつける。私はアナタたちの玩具ではない、こんな下品な連中に弄ばれるくらいならこのまま窒息しても構わない——のに。

「……ぷはっ！ はあ、はあ、はあっ！」

生理的欲求を抑えきることなどできるわけもなく、抗う気持ちを裏切って口が開いてし

まった。勢いよく往復する空気にしごかれ、喉の粘膜が渴いて痛くなる。

それよりも、息苦しさが消えていく気持ちよさが大きかった。一度開いてしまった口は顎が外れたように閉じられなくなり、唇の端からねっとりした涎が溢れ出す。顎を伝った粘る滴は糸引きながら垂れ落ちて、荒縄に緊縛されたチュチュの胸元を濡らした。

「自分で苦しみやがって、バカな女だ」

「ンぷっ!? ンあ……」

ゲポポッ!

荒い呼吸を繰り返す口に、太くて硬くて生臭い肉棒がねじ込まれた。ルビーのように滑らかな亀頭に上顎の粘膜がしごかれ、ゴツゴツした裏筋に舌を磨り潰される。

(うう、ああっ! 熱い、太い……き、汚い!)

風太のモノは口の中で転がすことができたが、無理矢理ねじ込まれたこの男根は無理だ。口いっぱいを占拠して、ゴツゴツした裏筋で舌を圧し、磨き抜かれたルビーのような亀頭の額でシフォンの咽喉蓋を押し上げる。

臭い、汚い、おぞましい——息苦しきから回復しきっていない心が乱れ、おかしくなりそうだ。慌てて退いた頭のうしろが便器にぶつかるが、構ってなどいられない。

「ンンうっ! ンもううっ!」

舌や唇に触れた汚らわしい物体を吐き出そうとして必死に藻掻いたのに、
「おおっ! 熱い息が亀頭をくすぐって……くううっ! たまんねえっ!」

かえって少年を悦ばせてしまった。ピンクのツイントールの根本がガッチリ掴まれ――。
グモモッ！ グポポッ！

荒々しい突き込みが始まる。

(ああ、ああ、あああつ！ こ、こんな、奥……までえっ!?)

灼けた鋼のように熱くて硬い塊が咽喉蓋を押し退け、食道粘膜までしごかれた。大きな肉クサビにグポッと塞がれる気道。息苦しさに涙が滲み、鼻腔に満ちる淡い精臭に咽せうになる。丸くて硬い筒先に喉奥を挟られると、うなじのうしろになにかが弾けた。

「んえ……お……ぷ、えあ……」

舌を動かして抗おうとしても、口腔を埋め尽くした淫棒はあまりにも太く、強引で、生臭い弾力の表面を虚しく撫で回すことしかできない。

「なんだあ？ チンポ啜えただけで目を白黒させてやがる。縛られるのが好きな変態のクセして、フェラもしたことねえのか？」

「彼氏とはどんなエッチしてたんだよ？ ひよつとしてこういうことか？」

口を犯されているシフォンの左脇に少年が立ち、ピンクの髪房を掌に掬った。

(な、なにを……まさかっ!?)

思うより早く、しなやかな髪が赤黒い淫茎に巻かれ、ジョリ、ジョリ、としごかれ始めた。肉棒の生臭さが髪に染みついてしまいそうだ。

「むえ、ぶあッ！ やえ、ええっ！」



汚辱に耐えきれず、淫肉で塞がれた口で叫ぶと、

「く、ううっ!? 喉のヌルヌルが震えて……くふうっ! き、気持ち、エエッ!」

叫んだ少年の手指にグッと力が込められ、喉奥を抉る動きが速まった。舌を蹂躪する若い牡肉が、ムク、ムククッ! と強張る。

(えっ!? こ、これって……まさか、そんなっ!? イヤ、ダメ、出しちゃ、ダメッ!)

後頭部を便器に擦りつけ、縛られた身体を必死に振って、口の中のモノを吐き出そうとするのに——ビュクッ!

ドピュピュッ! ドドドドプドプッ!

苦しよっぱい粘液のダメが勢いよく噴き出し、喉奥を叩かれた。

氣道を遡る青臭さ、食道を垂れ落ちていく熱い粘り気。

失神してしまいそうなくらいおぞましいのに、小刻みに震える怒張ペニスに口を塞がれているため、吐き出せない。刺戟を受けた喉が痙攣し、嚥下反射えんかが起きて咽喉蓋に貼りつき、舌の根に絡みつくネバネバをコクン、コクン、と呑み込んでしまう。

(ああ、イヤ……こんな……いやああっ!)

風太のモノを呑もうとしていたことなど忘れ、シフォンは声にならない悲鳴を張り上げた。温められた水糊のような感触が、胸の奥をゆっくり滑り落ちていく。

汚らしい、おぞましい——肉体的なダメージ以上のショックを受けて、シフォンは震えた。味蕾に染み込み込み食道粘膜に浸透する白濁液が、血液に乗って全身に行き渡り、身体

が内側から穢されていく。風太から分けてもらった瑞々しい魔力が、少年たちの劣情に毒され、腐臭を放つ負の力に変わってしまう――。

「ンだよ、早えな。なら俺も……くっつ！」

ビュッ！ ビュルッ！ ビュッビュッビュッ！

シフォンの髪でしごいていた少年も、我慢することなく射精した。粘る弧を描いて飛んだダマが左の頬に粘りつき、細いうなじを守るカラーにベチャベチャと貼りつき、鑿で削いだような鎖骨の窪みに糸引きながら垂れた。紅く染まった耳朵や襟足に揺れるしなやかなおくれ毛にも白い滴が吊り下がる。

(ああ、ああ……なんて、強烈な、匂い……)

腐った魚を煮詰めたような、ネバネバとした異臭。粘液を浴びせられた頬に染みつき、毛穴から浸透してくるような――と。

「ン……ぶ、あ……ケホッ！ ケホッ！」

ようやくペニス引き抜かれ、シフォンは咳き込んだ。淫棒の感触が残る唇から白く濁った汚れが垂れ、ピンクの薄布に守られたあどけない胸元にポタリ、ポタリ。

鳩尾みぞおちの奥がじんわりと熱い。食道を垂れ落ちた精液のダマが、ようやく胃の腑に達したらしい。これが風太のモノであれば、指の先まで魔力が満ち、こんな連中など一撃で熨おしてしまえるのに――。

「きったねえなあ、ポタポタこぼすんじゃねえよ！」

(ピンピンする、ピンピンしちゃ、うううっ！)

全身の神経が張り詰めて、細い身体が弦楽器のよう。胸先の肉豆を軽く爪弾かれただけで背筋に心地よい旋律が鳴り響き、クリトリスを撫でられれば天上の調べが奏でられる。

くぼちゅ、くぼちゅッ！

跳ね踊る身体の下では淫棒に抉られた肉穴があられもなく捲れ返り、紅い粘膜が咲きこぼれていた。息を荒げた少年がシフォンの腰に手を回し、奔馬の勢いで腰を突き上げる。背に貼りついた獣は甘く香る美少女の耳裏をベチャベチャ舐め上げ、剛毛に覆われた腹を擦りつけて、尻穴に潜り込んだ触手を激しくうねらせる。

「こわれちゃうう、こわれちゃうううッ！ オマ○コ、おしりいいイッ！ き、きもちよしゆぎて、しふおん、こわれちゃ、うううっ！」

膣や尻穴だけではない。

唾液に濡れた耳裏やうなじも、少女の手指に愛撫されている小振りな美乳も、牡を感じている場所はどこもかしこも気持ちいい。

「くううっ！ なんていやらしい鳴き声なんだ！」

「順番なんて待ってられねえよ、俺にも挿入させろ！」

昂った男子生徒が跳ねるシフォンの髪房を掴み、己の股間へ引き寄せた。

「ンあっ!? ン、ふ……!!」

唇に擦りつけられる熱い肉塊。

鼻腔をくすぐる生臭さ。

(あ、は……おちんちん、らあ……！)

淫悦に酔ったシフオンは男根の感触に頬を弛め、命じられるより先に口を開けた。

「あお……ンん、んポッ！」

赤々と照り光る亀頭を頬張り、そのたくましい硬さにうっとりする。

「な、なんだよ、口でもできるのかよ!? じゃあ、俺のもしゃぶってくれ！」

「ンう? ンぶあ……えへへ、あモッ！」

反対側から突きつけられたペニスにも、淫らな笑みを与えてむしゃぶりつく。

「やだ、サイテー! オチンチンならだれのもいいの!？」

少女たちの嘲笑は聞こえない。

ただひたすらに、

(オチンチン、オチンチン……もつと、もつとおっ！)

気持ちよくしてくれる肉棒を求め、潤んだ瞳で周囲を見回す。

——あるではないか。

そこにも、ここにも、あそこにも。

鼻息を荒げた若い牡のペニスが、跳ね踊る少女の周りに林立している。

「ン……ふはっ! ちょおらい、おちんち、ンううっ! もつと、もつとおっ! シフオンに、グリグリ、しちえええっ! いっぱいいっぱい、イイこと、しちえええっ!」

膾と尻穴をギュウツと絞めたシフォンは、舌つ足らずな声で鳴きながら手を伸ばした。親指と人差し指でひとつを握り、残りの指でもう一本。首は反対側に捻り、顔の傍で揺れていた新たなペニスに頬擦りする。

(ああ……ほっぺが、気持ち、イイッ！)

亀頭に触れた柔肌が心地よく痺れた。犯された肉穴の悦びと弄られた肉豆の快感が身体中に行き渡り、なんでもない柔肌まで性感帯になっているのだ。

「そんなにチンポが好きなのか？ なら、ここにも擦りつけてやる！」

「ああンツ!？」

汗ばんだ耳裏に擦りつけられると、魔獣に抱かれた背筋に熱いモノが走り抜ける。昂奮した少年が揺れる髪房を掴み、己の肉棒に巻きつけると、しなやかな髪の一筋一筋にも眩い稲光が駆けた。

「はう、はう、はうンツ！ イイ、イイッ！ オチンチン、イイイッ！ おくちにも、いれ、てええっ！ おしゃぶりしたいの、むちゅむちゅしちゃうのおおっ！」

「しようがねえなあ、そらよ！」

涎を垂らして泣き叫ぶ少女の鼻先に、左右から突き出される二本の棒。

どちらも猛々しく亀頭を膨らませ、凜々しく反り返った、甲乙つけがたい淫棒だ。

「あはあ……いちやらぎ、まあしゅー！」

アモツ！ んチュツ！

口を目一杯開き、二本同時に咥え込む。ふたつの肉瘤に舌を這わせ、せめぎ合う亀頭を唇で絞めれば、味蕾に染み込む甘辛さ、鼻腔を埋め尽くす生臭さ。

「くううっ!? し、舌が、絡みついて……」

「なんて柔らかな唇なんだ。それにこの、頬の内側のヌルヌルが……た、たまんねえ！」
肉棒を咥え込まれた少年たちが嬉しそうに呻くと、シフォンの口の中でペニスガミチミチ膨れあがった。ふたつの亀頭に挟まれた舌が熱い弾力にマッサージされる。顎が外れそうなくらい口を大きく開けて頭を前後に振ると、緩く捻れた淫茎に唇が揉まれ、ルビーのように硬く滑らかな肉瘤に頬粘膜をしごかれる。

(イイ、イイ……お口がオマ○コに、なっちゃったあ……)

内側から突き上げられてモコ、モコ、と膨れる頬が気持ちいい。ずっしりとした重みに舌が磨り潰されると、口と尻穴の間に心地よい波が往復し、窄む唇を真似るように淫棒を呑み込んだ括約筋がキュウツと締まる。

「おおっ!? ひ、姫の、尻穴が……!」

「ま、マ○コに、しゃぶられ、るうっ!」

少女を突き上げる獣と少年が、熱く濡れた粘膜に肉棒を絞られて悦びの声をあげた。

(ああ……オチンチンがシフォンの中で、ビクン、ビクン、してるう……!)

肉穴を犯した三本のペニスが、沸騰した血潮を溜めて力強く脈動している。肉膜を伝って流れ込んでくる牡たちの昂奮。

もっともっと、もっと欲しい——オチンチンが欲しい、精液が欲しい。

牝の本能に衝き動かされたシフォンは二本のペニスを頬張ったまま両手を左右に挙げた。視界の端で揺れている肉棒を掴み、その硬さ熱さにうっとりする。指の股にカリ首を挟んで、同時に何本もシュッシュッとしごく。

「な、なんだコレっ!? カリ首に、細い指が喰い込んで……く、ううっ!」

「掌がチンポに、吸いついて……マ○コより、いい、かもっ!」

汗を滲ませた少女の手指は赤黒く照り光る淫茎にねっとり絡みつき、コリコリした硬さで淫茎を責めた。柔らかな掌で亀頭を包み込み、

（あはあ、硬あい……シフォンの手、イイ? そんなに気持ち、イイ?）

牡肉の昂りに胸をときめかせながら手の動きを速めていく。

「くそおっ! 俺のにもしてくれよっ!」

待ちきれなくなった少年がシフォンの顔に赤黒く照り光る淫棒を押しつけた。別の少年は汗ばむうなじに瘤肉を擦りつけ、しなやかなおくれ毛に先走り汁を塗りつける。

柔らかな腋にも、グリリ、グリリッ!

膝上まで包み込んでいるピンクのニーソックスの中にも、グイグイ、グニニッ!

香汗を滲ませてしっとり輝く柔肌は怒張ペニスによく馴染んだ。強張った肉クサビに吸いつき、たくましい硬さに圧されるまま柔らかく歪む。絹のように滑らかな肌触り、溢れんばかりの瑞々しさ——桜色に火照った美少女の身体はどこもかしこも、粘液に潤んだ腔



や尻穴、唾液を滲ませた口腔粘膜にも劣らぬ悦びを生んだ。

肉の接触に快感を覚えるのは、少年たちだけではない。

「ンえあ!? え、えモ……ンちゅっ!」

身体中に男根を擦りつけられたシフオンは酔ったように顔を赤らめて朦朧となる。真っ赤な亀頭でグリグリ圧された眼球も、鋼の硬さを秘めた淫茎を擦りつけられた頬骨も、熱いぬめりを擦り込まれたうなじも、硬い肉クサビで抉られた腋や太股も——ペニスを感じた柔肌が心地よい。

(「浮く、浮く……浮いちや、うううっ! おちんちん、気持ちよすぎちえ……わちゃし、へん……おかしく、なっちゃ、つちゃ……!」)

濃密な精臭に頭が痺れ、身体のおちこちに擦りつけられたペニスに心まで突き崩されて、意識も蕩け始めた。

ここがどこで、だれになにをされているのか、分からない。

それでいい。どうでもいい。

温かな波間に揺られているようなこの気持ちよささえあれば、ほかのことは関係ない。

「シフオン……しふお、ンううっ!」

「ふ、え……?」

名前を呼ばれて目を向けると、少し離れた場所に、真っ赤な顔をした眼鏡の少年が座り込んでいるのが見えた。

(ええつと……あ、しょうか……ふうた、しゃんだ……)

いつも暗い顔をしていた風太は、いま、熟れ柿のように頬を赤らめ、眉根をふわ、ふわと開いていた。眼鏡の下の瞳は焦点を失い、ユラユラ揺れている。

気持ちよさそうだ。

本当はその手前に大きな尻——風太のペニスにむしゃぶりついたルードの桃尻が揺れているのだが、蕩けたシフォンの目には映らない。

呆けている少年の幸せそうな顔だけが、墮ちていく少女のすべて。

(わちゃし、イイ？　しょんにゃに、イイ？)

柔肌に感じるペニスを風太のモノだと錯覚する。膣や尻穴をグゴグゴ鳴らしているのも、唇を限界まで引き伸ばしてむくれた二本の肉棒も、風太のペニスだとしか思えない。

こちらの世界に来てからずっと、風太には迷惑をかけ通しだった。

だから、自分がすることで悦んでくれているなら、それに勝る喜びはない。

「ンうう……ちゅっ！　えへへ、ふうた、しゃああん……もつふお、かんじちえ……しふおんでもつちよ、もつちよもつちよ、きもちよく、なつちええ……あモッ！」

改めてペニスを頬張ったシフォンは前にも増して激しく手を動かし、握り締めた男根を激しくしごいた。上下に跳ねていた腰を回し、双穴を締めて、深々と潜り込んでいる肉棒に柔らかな粘膜を巻きつけてギューンギューン絞る。

「く、そ、おおっ！　チンポが、喰いちぎられ、そうだっ！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>